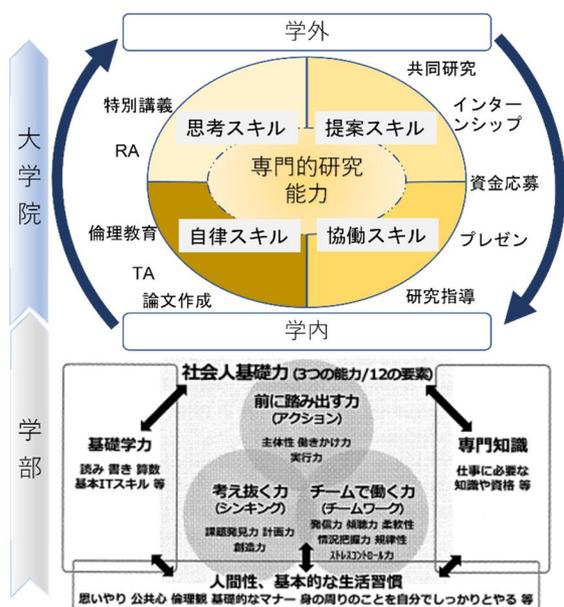


1. トランスファラブルスキルとは

欧米諸国にて、多様なキャリアパスを辿れるよう、博士課程を主とする大学院教育にて、「トランスファラブルスキル」の育成が目指されている。トランスファラブルスキルとは、「研究等のある1つの文脈・場にて学び得たスキルの中で、将来、研究職に就くにせよ他業種に就くにせよ、雇用・仕事等の他の文脈・場においても効果的に転用し活用できるスキル。」（欧州科学財団）と定義される。

日本においても、「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿」（2019年・中教審）等にて、「大学院教育の体質改善」として、2040年頃の社会変化（SDGs、Society 5.0、地方創生など）に対応するために「知のプロフェッショナル」の育成を、大学院が中心的に担うことが提言されている。ちなみに、「知のプロフェッショナル」とは、高度な専門的知識と倫理観を基礎に自ら考え行動し、新たな知及びそれに基づく価値を創造し、グローバルに活躍する人材の姿を指す。そこで求められる能力の2点目として、「自ら課題を発見し仮説を構築・検証する力等の、大学院でこそ身に付けることが期待される、社会を先導する力、様々な場面で通用するトランスファラブルな力」が挙げられている。

学士課程を通じて「論理性や批判的思考力、広い視野、コミュニケーション能力、他者と共生する力に加え、創造力、変化への適応力、主体性と責任感を備えた行動力、データ処理・活用能力など、普遍的なスキル・リテラシーを身に付ける」（2018年・中教審答申「2040年



に向けた高等教育のグランドデザイン」ことが求められており、こうしたいわば学部での社会人基礎力や教育の職業的レリバン（キャリア教育）の上に、大学院にて、専門的研究能力を専門分野に閉じることなく、異なる分野・職種・文脈においても転用できるよう、参加型学習・状況的学習・正統的周辺参加により、異質化された集団が一緒になって学ぶことで、トランスファラブルスキルを育成することが求められている。

※学部の図は、井上公人・中西啓喜「後期近代における『能力』育成メカニズムにかんする研究」（2013年）を引用。

☞ トランスファラブルスキルとは、異なる分野・職種・文脈においても転用できるような普遍的なリテラシー。学部でのキャリア教育・社会人基礎力の大学院版。

インターンシップや共同研究といった学外との連携や活動を踏まえた現実社会でのリアルな課題解決に取り組む「真正な学び」でスキルアップを図る！

2. 本大学院での実学的スペシャリティー

本学学部・大学院では「農場から食卓まで」、〈生産→加工→流通〉のものづくりの一連のプロセスを学ぶ。純粋学問を追究する、いわば抽象的な学びとは異なり、実学教育を特徴としている。トランスファラブルスキルは、学びを学内に閉じることなく、企業や労働現場に身を置き、あるいは連携することで現実社会のリアルな課題を自分事として捉え、それを研究活動によって解決していく「真正の学び」・「正統的周辺参加」といった参加型学習によってこそ育まれるとされる。すなわち、本学での学びはトランスファラブルスキルを育む上で、実学的スペシャリティーを有する。

このスペシャリティーは、さらに、専門分野での知識・研究能力の転移・転用・応用という観点で、優位性をもつ。すなわち、教育の職業的レリヴァンスを得る上で、1つの実学的専門分野を高度に修得することの優位性は「柔軟な専門性」(本田由紀・2009)と呼ばれ、「特定の専門領域や分野、テーマを入口ないし切り口としながら、徐々にそれを隣接・関連する領域へと拡張・転換していくことを通じ、より一般的・共通的・普遍的な知識やスキル、あるいはキャリアを身につけていくプロセス」を意味する。

こうした本学でのスペシャリティーを最大限に活かし、本学でのトランスファラブルスキルの育成をプログラム化した。